HADOMI no DAME –LOVE and PEACE–

木村　みゆき（千葉県　団体ボランティアスタッフ）

●「知るは理解を　理解は愛を」

日本のODAを知ることになった一つにフィリピンのセブ島とマクタン島を結ぶニューブリッジがあります。私は以前ここを訪れました。

日本の建設企業が協力して作った橋でセブシティを中心とするフィリピン第二の都市圏メトロセブの交通網の一部を成しており流通・観光を担う大動脈です。そこには、日本の国旗とフィリピンの国旗が大きく掲げられています。

日本の役割と大きな貢献を海外で見て知る機会になりとても誇らしく思いODAに興味を持ちました。

国際社会での信頼がどのように日本の繁栄や安定の礎になり私たちにつながっているかを知り、発信する機会にしたいというのが国際協力レポーターへの応募の動機となりました。

タイス市場の子どもたち

元国連事務次長の明石康氏は派遣活動に向かわれる人達に「その国の文化を楽しめる人になりなさい」と仰いました。

愛する＝楽しめる　東ティモールへの派遣が決まって私は大いに楽しんで心の眼を大きく開いて感じて来ようと思いました。

マウビシ村の農村女性

「知るは理解を　理解は愛を」は私の活動のフィールドであるガールスカウトにおいて世界中で使われた活動のテーマです。

知るだけでは理解できないのです。理解だけでは愛する事はできないのです。そこに能動的に生きる姿勢がなければ何も始まらないそう思っています。

能動的に生きる…この結果たくさんのチャレンジと貴重なチャンスを頂いてきました。

今回も国際協力レポーターというチャンスを頂き、東ティモールで見てきた国際協力の現場には「世界（国）を見つめ感じる心を持つ人」「知恵と知識と工夫を重ねあきらめない人」「できる事はどんどんやる人」そんな人達に溢れていることを知りました。

手作りの脱穀機でコーヒー豆を脱穀するマウビシ村の女性

●国際協力はイマジネーションと一緒にやるという事

テクノロジー・工業技術専門学校で活動される青年海外協力隊の塩田隊員は生徒たちに自己紹介するときにグーグルアースのリアルな 3D映像を使って、実際に日本を訪問しているかの様に「自分の国」を見せたそうです。ここは違う国を知った生徒たちのイマジネーションが膨らみそれはいつか夢や希望に繋がり、そしてやる気に繋がればという願いからでした。「現状に嘆くのではなく今できる事の中で一生懸命考える」「相手を変えるのではなくまず自らの姿勢で辛抱強く伝える」など、いろいろなエピソードから垣間見る実直な人柄と、テクノロジー・工業技術専門学校にとって青年海外協力隊の派遣という支援ではなく違う形の支援にした方が良いと感じていることから後任は望まないと決めている潔さに国際協力への本気度を感じました。

義肢装具を説明する松野由恵隊員

ナショナルリハビリテーションセンターで活動される義肢装具士・制作の松野由恵隊員からは、東ティモールの女性の地位の低さからくる苦悩があったという話を聞いて胸が詰まりました。それを解決したのは現地スタッフと一緒に手を動かし肩を並べることの大切さだったと、彼女は言っていました。「ここにある材料で、最高の義足を作る！」と言う松野隊員の笑顔と、障害はいろいろな事（行政・制度・仕組み）と連鎖するのでフォローやサポートをする上でジレンマもあると言った言葉が交錯します。

弱者のための上水と言う小林専門家

国営ラジオテレビで活動される門上晋一朗隊員からメディアは「面白くそして本当の事を伝えることが大切。そして一緒に苦労して仲間になる。その仲間のおかげで自分の中にあった現地スタッフとのフィルターが無くなった」と。門上隊員が制作した子ども向け番組は国境も言葉も超えた面白さがありました。

東ティモール水道局の小林専門家の水道に対する愛情と熱意に、日本人として、また同じ県民として誇りを感じました。一緒にやって一緒に経験しながら現地スタッフに上水道を維持しているという当事者意識をもってもらう。そして浄水場の運営維持管理のスペシャリストを作るというこの気概こそが、日本の信頼に結びついているのだと思いました。

日本のODAは世界各国・機関との協調の中で相手国に対し左右上下、色々な角度からの支援を行っていることを理解しました。そしてまた国際協力の最前線で身体を張って頑張る日本人に目が離せませんでした。

●「ハノイン・バ・オイン（未来に向けて考える）」

人口の半分が18歳以下という若くて未成熟な国である東ティモールの最大の課題は初等教育の充実なのだと思います。読み書きから始まる知識は知恵となりそして理性へとつながります。そんな教育の必要性は町や学校などのゴミの多さからもうかがい知ることができました。国作りは人作りと言います。日本の繁栄が人作りであったことは今回の視察でよく理解できました。そして人作りの基本は教育なのだということも実感しました。

農村女性の支援JICA鈴木桃子専門家

農村女性による経済活動支援の視察で訪れたマウビシの村を担当する、パルシックのスタッフであるアンジェリーナは「この事業で知識と方法を習得し他の集落にも良い影響を与えられた。そして夢を持つことが出来た」と言いました。彼女たちはグループ名を「ハノイン・バ・オイン（未来に向けて考える）」と名付けていました。考えるということは夢を持つチカラを生みます。そこには鈴木桃子専門家の根気強く温かい支援がありました。このように国際協力の現場では歩み寄り正直に一緒にやってきたジャパンスタンダードと言われる日本人の頑張りがあります。国際協力とは道路や建物は変わっても人々の生活はなかなか変わらないけれど、道路や建物でない生活を変えるために、成熟している日本が得意なことでリードしWin Winの関係で世界を一緒により良くしていこうとすることです。そしてそのプロセスに日本の発展も成長もあるのだと思いました。

在東ティモール日本国大使館　日本の国際協力は一緒にやるという事

最後になりましたが国際協力の最前線の現場で身体を張って活躍される日本の国際協力関係者、青年海外協力隊、JICA職員、その他関係者の方々のご尽力に感謝するとともに、日本人として大きな勇気と誇りを感じることができましたことに御礼申しあげます。

＊タイトルは東ティモール青年海外協力隊の機関誌名です。敬意を表して。